

天理大学ふるさと会海外研修報告書

武器から見る近代モンゴルの国際関係

国際学部地域文化学科

ヨーロッパ・アフリカ研究コース 4年 山口信太郎



◎はじめに

この度はふるさと会海外研修に採用して頂き、誠にありがとうございました。一見物騒な私の研究計画への支援を決定して下さった審査員の皆様方、この研修制度の存在を教えてください、計画内容の検討や細かなアドバイスまでして下さった先生方、異郷の地にひとりで3週間赴く私を励ましてくれた友人たち、そして、幼少期からずっと私の興味を否定せず、夢を叶えるべく闇雲に動く私を常に温かく見守ってくれた母――研修を無事に終え、一定の成果を得ることが出来た今、私を支えてくれた全ての方々に、心より感謝致します。私が無事に研修旅行を終え、素晴らしい成果と経験を得ることが出来たのは、全て周りの皆様の支援のお陰に他なりません。

私は2023年7月31日より8月21日までの3週間、モンゴルにて研修をさせていただきました。この3週間のうちに私は、首都ウランバートル、ウランバートル郊外の都市ゾーンモード、モンゴルの北辺スフバートル、そしてロシアとの国境の町アルタンボラクといった地域を巡り、現地調査を行って参りました。以下に、その調査の成果等を報告させていただきます。なお、簡潔さを期して、以下の「研修目的」および「行動記録」は、全編常態(だ・である調)で表記致しました。

◎研修目的

モンゴルが史上初めて独立を成し遂げたのは、1911年のボグド・ハーン政権成立時であった。この独立は1920年に失われたが、翌1921年にはモンゴル人民共和国として再独立を果たした。そしてモンゴル人民共和国の領土は、現在のモンゴル国の領土と完全に重なっている。いわばモンゴル独立の基盤ができたのが1911年、その基盤が完全に固まったのが1921年なのである。モンゴル史上初の独立国家、国民国家形成が推し進められたこの10年前後は、歴史の連続性という観点から見てもモンゴル史において非常に重要な期間である。そしてこの期間に、モンゴルの軍隊は何度も、変化する内外の情勢に合わせて変質している。

私は、ある国の軍隊がどのような武器や制度を用いているかで、その国の国際関係が読み取れるのではないかと考えており、現在作成中の卒業論文も、そうした持論をもとに、近代モンゴルの国際関係を軍隊の姿を通して考察する、というものである。

本研修の目的は、モンゴルの博物館や図書館を訪問し、日本ではあまり手に入らない近代のモンゴル軍に関する資料や文物を探し出して、卒業論文執筆の一助となる資料を得ることであった。

◎行動記録

【7月31日(月)】

この日は1日、移動に費やした。正午に韓国・仁川国際空港行きの飛行機に搭乗し、15時頃に仁川に着いた後、翌8月1日午前1時半頃に仁川を発つモンゴル・ウランバートル行きのMIATモンゴル航空機の出発まで、日を跨いで8時間ほど空港で待機した。

【8月1日(火)】

ウランバートルの南西、チンギス・ハーン国際空港に着いたのは午前4時半のことだった。空港内は早朝から出入国の人々でごった返していた。空港内の携帯ショップでSIMカードを購入した後、空港の正面ゲートで声をかけてきた運転手に頼んでウランバートル市内まで送ってもらった。空港から市内までは約50キロ。運転手が求めたのは7万トゥグルク(約3000円)。若干ボラれたが、日本のタクシー料金と比べたら破格の値段だし、モンゴル人と1対1で会話できる機会も買ったと思えば安いものだった。

市内へ通じる道路はとても空いていて、途中までは順調だった。しかし市内に近づくほど渋滞が起こり、市内に入ると渋滞は停滞となった。ドライバーのマンチルさん曰く「モンゴル人はたいてい1人が2台車を持っている。1台は都会用のプリウス、もう1台は田舎や草原用のランドクルーザーだ」。確かに、よく見ると周りに並ぶ車の過半数がプリウスだった。後で知った話だが、モンゴルでは日本車に関税がかからないため、中古の日本車がよく売れるらしい。



タクシードライバーのマンチルさんと共に。
この後もマンチルさんには散々お世話になった。

ちょうど正午に宿泊先のゲストハウスに着いた。スタッフの方々も他の宿泊客の方々もみんな優しそうな方ばかりで、安心した。ここまで一睡もしていなかったので、チェックイン終了と同時に、割り当てられた2段ベッドで眠ろうかとも思ったが、興奮の為か眠れなかったもので、午後の市内を散策することにした。

ウランバートルに来るのは人生で2回目だった。去年(2022年)の9月に初めて訪問した時と特に変わった点は殆どなかった。車通りの多さも、ノミンデパート(旧国立百貨店)の土産物コーナーがチンギス・ハーン・グッズで溢れているのも、1万円=約24万トゥグルグという相場も、去年と全く同じだった。

午後、ウランバートルの中心地にあるモンゴル歴史博物館を訪問した。ここには、私の卒業論文の研究対象であるモンゴル近代史に関する展示品が数多く陳列されている。この後

に訪問する博物館もそうだが、モンゴルの博物館は基本的に料金さえ払えば写真撮影は可能である。今回の研修旅行で、私のスマートフォンの写真フォルダは満杯になった。

歴史博物館での収穫は素晴らしいものだった。実物の、1911年のボグド・ハーン政権時代の軍服や軍旗から、ボグド政権軍兵士の訓練風景を写した写真や、機関銃部隊員とロシア人教官たちの集合写真など、当時の兵士たちの姿を生き生きと伝え、それと同時に装備類や服装の模様をありありと示す貴重な資料に出会えた。

特に武器類の展示は圧巻だった。展示されていた武器の中でも、特に「研修目的」の項目で述べた私の研究対象の時期にモンゴル軍が用いていたのは、モーゼル拳銃、マキシム機関銃、ベルダン・ライフル、そしてモシン・ナガンの4種類であった。モーゼル拳銃以外は全てロシア製の銃である。1911年11月、清朝の支配から脱したモンゴルは、パトロンであるロシアから大量の武器の援助を受けたが、その武器の中には750万丁のベルダン・ライフルが含まれていた。歴史の中から飛び出して来たかのようなベルダン・ライフルを前にして、私は少々感動してしまった。

1921年の社会主義革命時に結成された人民義勇軍の装備品にも圧倒された。人民義勇軍の軍旗や印章、号令用のほら貝と言った品々から、今もモンゴル革命の英雄とされているスフバートル将軍が着用していたという帽子やデール(民族衣装の長衣)まで、貴重な品ばかりだった。スフバートル将軍のデールを見た時は、思わず涙が出そうになった。「これまで本や写真でしか見たことのなかったスフバートル将軍は、本当にこの世にいたんだ」と。

それにしても驚かされたのは、実物の機関銃がショーケースの中に入れてられているわけでもなく、当たり前のように床の上にドンと置いてあったことだ。こうした大雑把さには、この後も何度も驚かされることとなる。

【8月2日(水)】

ウランバートルは一見観光客が多いが、それは中心街だけの話である。市の中心から少し歩けば、社会主義時代に建てられた団地や背の低い雑居ビルがひしめき合う、モンゴル人しかいない空間となる。そんなウランバートル郊外、市内東部の町中の団地の間に立つ、広い敷地を持つ暗いベージュ色の地味な建物が、モンゴル軍博物館である。

ゲートを潜って右側の敷地には、モンゴル人民共和国時代にソ連から提供された装甲車や戦車が並べられ、その奥には多連装ロケット砲や重砲、対戦車砲が鎮座している。左側にはソ連製のミグ戦闘機や地对空ミサイル、対空機関砲が並んでいる。どれも野ざらしだった。ひとしきり兵器の前で記念撮影をした後、館内へと歩みを進めた。

入館してすぐにおち当たる1階のホールには、人民共和国期の軍服の機関銃が大量に展示されていて視線を奪われたが、冷静さを取り戻し、歴史順に館内を散策することにした。

古代の軍事に関するコーナーには、モンゴルで発掘されたという原始時代の石の矢じりや石斧などが展示されていて、自分が考古学博物館にいるのではと錯覚させられた。しかし遊牧騎馬民族・匈奴の弓矢や刀剣がショーケースに並ぶようになってからだんだん全体の

雰囲気が変わり、モンゴル帝国時代の武具や馬具のコーナーに来た時、やはり自分は軍事の博物館にいるのだなと実感させられた。実物の鎧や武器、馬具、投石機など、映画の中で見かしたことのないものが目の前に飾られていて、ただひたすら驚かされるばかりだった。

次はお楽しみの近代モンゴル軍のコーナーである。前日に国立博物館で見たのと同じボグド政権軍の赤と黄色の軍旗やベルダン・ライフルは特に目新しくなかったが、人民義勇軍に関する展示が豊富なのは有難かった。特に興味深かったのは、アメリカ製のルイス軽機関銃が人民義勇軍の装備として展示されていたことである。人民義勇軍は1921年、モンゴルの独立回復の為にソ連の支援の下で結成されたのだが、そんな同軍がアメリカの機関銃を使っているとはどういうことか。後になって知ったことだが、米英仏日の軍隊が誕生間もないソ連を打倒するべくシベリアへ出兵していた時期、半ゲリラ組織的だったソ連軍では、敵の武器を鹵獲するのが当たり前だったらしい。私がここで見たルイス軽機は、恐らくソ連軍に鹵獲されたのち、人民義勇軍の手に渡ったものだろう。思えば数奇な運命である。

数奇な運命と言えば、私は同博物館で、知る人ぞ知る、1923年にモンゴル人によって描かれたレーニンの肖像画と出会った。その肖像画の中で、レーニンは花に囲まれ、地球儀を背にしてほほ笑んでいるのだが、言語学者でありモンゴル研究家でもある田中克彦氏は、この肖像画を非常に仏教的だと分析しているのだ。熱心な仏教徒が多く、その反面社会主義に対する知識は殆ど持ち合わせていなかった人民共和国成立当初のモンゴル人は「多くの人々の幸福を願って、そのための理論を作った」とされる革命家レーニンを、衆生を救済するべく身を粉にした釈迦牟尼と重ね合わせて見ることで理解しようとした――そうして考えると、レーニンが仏様のように花に囲まれ、地球儀の光背を背負っているのも納得がいくというのだ。まさかここで、社会主義という未知の思想を理解しよう藻掻いていたモンゴル人が作り出した、異色の作品に出会えるとは思わなかった。

そのあとは、第二次世界大戦期から1991年まで続いた人民共和国時代、そして現代のモンゴル軍の装備品が展示されていたが、端的にまとめるなら、人民共和国時代の装備は全てソ連式であった。モンゴルとソ連の関わりを強く思い知らされた。思えば、同博物館の学芸員さんは全員、片言ながらロシア語が話せた。50代らしき女性の学芸員さんに「なぜロシア語が話せるんですか？」と聞くと「私たちの世代は全員小学校で習わされた。今の子供たちは英語を習うんだよ」と返された。翌3日に訪問した場所も、モンゴルとソ連のかかわりの深さを示唆する場所であった。

【8月3日(木)】

この日の朝、私は昨日の午後、軍博物館の帰り道に少しだけ立ち寄ったナラントール・ザハ市場で購入したモンゴルの民族衣装・デールを着て宿を発ち、曇り空のウランバートルを歩き回ることにした。デールを着ての外出は人生初だったが、着心地が良く快適で、何より、自分がモンゴル人の一員になれたような気持ちになれた。町中のショーウィンドウに映る私の姿は、まるで100年前の写真から飛び出して来たモンゴル人のようだった。モンゴル

人から見てもかなり似合っていたようで、町中で度々通行人からモンゴル語で「良い DEAL だな、どこで買ったんだ？」と声をかけられた。「ナラントール・ザハですよ」と返すと「俺も探しに行ってみるよ」という言葉が笑顔と共に返って来た。

この日の私の目的地は、ウランバートルの南にある、ボグド・ハーン宮殿博物館であった。1911年、300年以上に及ぶ清王朝の支配から脱却するべく、モンゴルの王侯は極秘でロシア帝国からの支援を受けて独立するべく計画を立てた。そして同年10月の辛亥革命で清がパニックに陥っている際に、モンゴルは清からの独立を果たした。この極秘の中心人物のひとりが、当時モンゴルで絶大な権力を誇ったチベット仏教の活仏ジェブツンダンバ・ホトクト8世であった。彼は1911年12月のモンゴル独立時、モンゴルの君主としてボグド・ハーン(神聖皇帝)の座に就き、聖俗両界の最高権力者となった。しかし、ロシアと新生中華民国の2大国に挟まれたボグド政権は種々の圧力や問題に対処する力がなく、ボグド政権は1920年には崩壊。同年、白軍がモンゴルを占拠した際と、翌1921年に人民政府が樹立された際、ボグドはモンゴル民族統合のシンボルとして傀儡君主の座に祭り上げられたが、1924年に病没した。ボグド・ハーン宮殿博物館はその名の通り、ボグドが生前住んでいた宮殿を博物館に改装したものである。

ウランバートル市内を流れるトーラ川にかかるエンフタェヴァン(平和)橋を南に渡って少し進むと、ビル街と大通りの間でひときわ目立つ、色あせた赤い巨大な寺院のような建物が見えて来る。それが博物館である。ゲル(遊牧民のテント)を模したチケット売場をくぐると、とても大都会ウランバートルの一角とは思えない光景が目に入る。中国のものとも、日本のものとも違う、エキゾチックなチベット仏教建築の門が立っているのである。装飾も建築もかなり派手だが、全体的に色あせていて観光客も少ないため、なんだか寂れた印象を受けた。しかし、金ピカの派手な仏像や伽藍より、黒く落ち着いた色彩の仏像や伽藍の方が神秘的と感じる私にとっては、とても味わいのある外観だった。



宮殿博物館の門



ボグド・ハーンの冬の宮殿

門を潜ると、正面にはチベット式の大きな堂宇が立ち、右手には意外なことに洋館が立っていた。後で知ったことだが、ボグド政権誕生以前、ジェブツンダンバは宮殿の一角にロシ

ア風の洋館を建て、冬はそこに住んでいたという。この洋館内には、ボグドとその妻エヘ・ダギナの生前の愛用品が展示されている。前述の「チベット式の大きな伽藍」内には大きな仏像が安置されているはずなのだが、改装工事中で中を見ることが出来なかったため、やむなく私は洋館へ直行した。

館内には、ボグド夫妻が用いていた玉座や装飾付きの寝台、法具や装身具から、ボグドに献上された品々まで、宝物庫の名に相応しい品々が展示されていた。興味深かったのは、数多くの献上品の中にロシアのものが多かった点である。例を挙げるなら、アフリカや南米の鳥類や哺乳類、魚といった、モンゴルにはいない動物の剥製や、装飾付きの馬車などである。銀製の象の置物もあったが、その傍らの解説によると、ロシア政府はジェブツンダンバに生きた象を送ったことがあるらしい。

思えば、前述の1911年の独立時、ボグドらモンゴルの王侯がロシアを依存対象とした背景には、モンゴル人王侯の親露感情があったためだとする論文は非常に多い。実際、ボグド政権がロシアを頼ったことについてロシア側が「長年の懐柔工作の成果」と記した資料や、ロシアがモンゴル王侯に多くの贈り物を贈ったという記録も残っている。そうしたプレゼント攻勢がモンゴルの親露化と独立に繋がっていたのだとしたら、この時私が見た珍品至宝は、歴史を動かした重要な証拠物件ということになる。洋館から出てそのことに気付いた時、自分がついさっきまで見ていたものの重大さに背筋が凍る思いだった。

【8月4日(金)】

この日は、ウランバートル市博物館へ行った。1921年の社会主義革命の英雄スフバートル将軍の家を改装したものだという同博物館は、見た目こそ質素な一軒家ながら、展示品の素晴らしかった。市博物館の名の通り、館内にはウランバートル市が歴史を示す文物絵画がいくつも展示されていた。



ウランバートル市博物館

遊牧社会のモンゴルにはもともと多くの人定住する「町」は殆どなかったが、17世紀、ジェブツンダンバ1世がトーラ川のほとりに寺院を建てると、その周りに信者たちが集ま

り、町が形成された。この町は当初「フリエン(囲い)」と呼ばれ、のちに「フレー」と訛り、ボグド政権時代には首都と定められた。しかし、社会主義革命が成功し、ボグドが没した後、首都フレーはウランバートル(赤い英雄)と改名された。これが同市の歴史の概略である。

館内には、ウランバートルで発見されたという、古代遊牧騎馬民族・匈奴が用いていた道具や、チンギス・ハーン時代の馬具や武具、遊牧民の生活用品といった小物類から始まって、17世紀、18世紀に描かれたフレーの地図や当時の街路の模型なども展示されていた。

しかし私が最も興奮したのは、私の研究対象である近代モンゴルに関する展示コーナーである。ボグド政権誕生前後に撮影されたフレーの貴重な写真や、20世紀初頭の地図など、どれも個人的には感動の品々ばかりで、中国留学経験者だという英語が達者な学芸員さんが横で解説していなければ、ショーケースの前から動けなくなりそうであった。

社会主義期に関する展示品にも、ある意味驚かされた。プロパガンダ一色だったからである。社会主義の勝利と優越性を描く芸術の方針を「社会主義リアリズム」というが、私がここで見た絵画の殆どは社会主義リアリズム的であった。例えば、スフバートル将軍率いる革命軍を喜んで迎えるフレー市民の図、初のラジオ放送を聴いて歓喜する人民の図、市内に初めて灯った街灯を見てほほ笑む人民の図などなど…。事実を描いている側面もあるのかもしれないが、秘密警察による粛清の横行という社会主義期のモンゴルの暗部も学んでしまっている私にとっては、苦笑いせざるを得ない展示場であった。

社会主義期に対してはモンゴル人も微妙な感情を抱いているらしく、この時期の絵画に関する説明は心なしか短く、いくつかの作品に至っては学芸員さんは説明を省いていた。絵画ばかりでなく、社会主義期に作られたミシンやピアノといった品物も展示されていた。これは普通に見ごたえのある品物ばかりだった。アメリカの会社に特注したという縦書きモンゴル文字用のタイプライターになどは、社会主義化から間もない頃のモンゴルの国際関係を考えるうえでは、なかなか興味深い品物であった。展示も一通り見終えつつあった頃、前述の学芸員さんは、館内に置かれたピアノを指さして「これはモンゴルで初めて生産されたピアノのひとつだ」と言った後、おもむろに鍵盤を適当に弾き始めた。仰天する私に対して学芸員さんは一言「古いから、音がずれている」と、流暢な英語で言い放った。日本では考えられないことだが、私はこうしたモンゴルのおおらかさに惚れたのである。

【8月5日(土)】

この日の私の目的地は、ウランバートルの南に位置する丘、ザイサン・トルゴイであった。同地を目指して、またもやデールを着て市内を南に向けて歩いていると曇天の下に、何やら旗を高々と掲げた兵士をかたどった大きなモニュメントが立つ、小高い丘が見えて来た。それこそがザイサン・トルゴイである。1921年の社会主義革命以降、1991年のソ連崩壊まで、モンゴルはずっとソ連の衛星国であった。ザイサン・トルゴイはそんな時代に作られた、社会主義の勝利とソ連への感謝を表す巨大モニュメントである。モンゴル近代史を研究する者として、ここを訪れないわけにはいかなかった。近くまで来て分かったが、ザイサンの丘

の下には大きなショッピングセンターがあった。社会主義の記念碑の下に資本主義の権化のような建物がある光景には驚いたが、それ以上に驚いたのはショッピングセンターの前の広場に戦車が置いてあったことである。

曇り空へ向けて砲身を傾けたT34 戦車を載せたコンクリートの台座には、モンゴル語で「モンゴル人民の寄付で創設された革命モンゴル戦車隊は対独戦に参加せる」と刻まれていた。第二次世界大戦中、モンゴルはソ連を支援するべく多額の寄付を集め、その寄付金で設立されたのが「革命モンゴル戦車隊」であった。どうもこれは同戦車隊の活躍を祈念したモニュメントらしい。広場には、モンゴルとロシア両国の国旗が翻っていた。



ザイサン・トルゴイの遠景



社会主義の勝利を前にほほ笑む筆者

ショッピングセンターの脇の階段を登りきると、鉄筋コンクリートの巨大な兵士と、輪が目の前に迫って来た。輪の中にはモザイク画で、モンゴルとソ連の「戦闘的友情」の歴史が描かれていた。ロシア革命、モンゴル革命、第二次世界大戦、幾多の困難が輪に沿って描かれ、そして最後は、モンゴルとソ連の人民が手を取り合う場面が描かれている。そんなフィナーレの場面の真下からは、ウランバートル市街が一望できる。「今日のこの幸せは、ソ連のお陰ですよ」ということだろう。手の込んだプロパガンダの仕掛けである。

確かにモンゴルの近代化や発展を最も支えてきた国はロシア・ソ連である。1911年の独立時も1921年の革命時も、モンゴルはロシア・ソ連に依存して来た。その点は否めない。一方でロシア・ソ連にとっては、中国や日本との緩衝地帯としてモンゴルは懐柔しておきたかった。モ・ロは両国ともに、互いを利用しようと目論みつつ20世紀を過ごして来た。

そうした歴史を振り返っていると、ポツポツと雨が降り始めた。ザイサン・トルゴイには屋根が無いので、私を含む観光客全員が大慌てで階段を駆け下り始めた。その時、なぜかこ

のタイミングで頂上へ登ろうとしている韓国人観光客の中年男性に「君が着ているのはモンゴルの民族衣装？」と韓国語で尋ねられた。私が韓国人に見えたらしい。「そうですよ。ナラントール・ザハという市場で買いました」と答えると「俺も買おうかなあ」と笑顔で答えて、頂上へと再び歩き始めた。失敗した社会主義の国の社会主義礼賛のモニュメントの下で、資本主義国家・日本と韓国の間人が出くわすとは、不思議な縁であった。

【8月6日(日)】

この日の私の目的地は、ジューコフ博物館であった。ジューコフとは、1938年のハルハ川戦争(日本・満洲連合軍とモンゴル・ソ連連合軍の戦争。日本ではノモンハン事件として有名)でモ・ソ連合軍を率いて勝利を勝ち取り、7年後の1945年には第二次世界大戦でソ連を勝利へと導いた名将ゲオルギー・ジューコフのことである。ソ連ではもちろんのこと、ハルハ川戦争での恩義があるモンゴルでも、彼は英雄視されている。ジューコフ博物館は、そんな彼のハルハ川戦争での功績を称える博物館である。

一見、大きめの一軒家のような外観の同博物館だが、中庭に対戦車砲が2門飾られ、外壁にでかでかとモンゴル語で「ジューコフ博物館」と書いてあるので、すぐにそれと分かった。

片言のロシア語を話す、学芸員らしからぬ風体の中年男性の管理人からカウンターでチケットを買い、展示室へ入ろうとした。すると、この管理人がロシア語でいろいろと話しかけて来る。フレンドリーなのは有難いが、なかなかしつこい。するとカウンターの電話が鳴った。彼が対応に追われている隙に、私は展示室へ入った。部屋のつくりは決して豪勢ではなかったが、実際の武器や地図、写真等の展示品はどれも素晴らしかったので、無問題であった。特に驚いたのは、実物の機関銃がショーケースにも入れられず、無造作に床に置いてあったことである。本物の銃をあんなに間近で見ることなど、人生でそうそうないだろう。



ジューコフ博物館



車輪付きの PM1910 機関銃と DP28 軽機関銃

モ・ソ軍と日満軍の配置、行動の様態を日付つきで紹介した地図や、戦闘の様子を克明に写した写真なども、食い入るように見てしまった。隣の展示室には、モンゴル軍の軍旗や軍人手帳、勲章、ジューコフが愛用していた執務室の机や電話等の貴重な品々が展示されていた。どの展示品の解説も、モンゴル語とロシア語で書かれていたため、ロシア人の来客も

多々あるのだろう。だから係員も、片言とはいえロシア語が話せるのだろう。

などと考えていたら、電話を終えた管理人が現れ、またもや長々と話しかけて来る。一体私の何がそんなに面白いのかと思えば、突然「私の趣味は外国のお金を集めること。私の1万トゥグルグと君の1万円、交換しない？」などと言い出した。なるほど彼の興味は私ではなくお金だったらしい。それにしてもとんでもない話である。数字の数こそ同じ1万でも、1万トゥグルグは日本円でたったの400円程度である。交換などしたら、彼が得をするだけである。こんなペテンに引っかかってたまるかと「すまないが、私は現金を持っていない。全てカードで済ませている」と、こちらからもペテンにかけ返してみると、フレンドリーだった管理人の態度は豹変「さあ、今から掃除だから、そろそろ出て行ってくれ」とのたまう。トラブルは避けたかったし、何より展示も全て見終えていたので、言われた通り退館した。

昼下がりの大通りを歩きながら、ふと、自分のロシア語が想像以上に上達していたことに気付いて、とても嬉しくなった。

【8月7日(月)】

この日はガンダン寺を訪問した。ガンダン・テグチェンリンという長い正式名称を持つ同寺院が建立されたのは、1838年、ジェブツンダンバ5世の時代だと言われている。1921年の社会主義革命後もモンゴルではチベット仏教が一定の信仰の自由を認められてはいたが、1930年代、ソ連の影響で極左偏向すると多くの僧侶が反動階級として粛清され、ガンダン寺も寺院としての機能を失った。しかし極左路線が修正された1940年代以降に復興を遂げ、1991年の社会主義政権崩壊まで、寺院として細々と経営を続けた。民主化以降も、モンゴルで最も歴史と伝統を持つ寺院として、多くの人々の尊崇を集めている。



ガンダン寺本堂前での記念撮影

境内に入ってすぐの庭に、金色の幼少の釈迦像が立っていた。生まれてすぐ 7 歩歩いて「天上天下唯我独尊」と言ったというエピソードをもとにしているのだろう。頭上には色鮮やかなタルチョー(祈禱旗)が翻っている。その隣には、白い石壁の上にお堂が乗ったような独特の形をした伽藍が立っている。堂内は見渡す限りカラフルな天蓋や、雲や蔦をかたどった飾り、高僧用の朱色の椅子、黄金色の仏像で溢れ、エキゾチックな雰囲気が満ちていた。参拝客たちは手を合わせたり、その場にうつぶせになって五体投地に励んだり、それぞれが全身全霊で祈りを捧げていた。モンゴルの仏の加護を受けるべく、私も手を合わせた。

その後、境内の奥にある観音堂へ向かった。堂内には巨大な観音像があると聞いていたので、私の期待は高まっていた。観音堂へ向かう途中、いくつかの小さな平屋建ての仏教風建築の建物を見かけた。一見伽藍らしからぬ建物なので、気になって近寄って案内板を見ると「哲学研究所」「薬学研究所」などと書かれていた。かつてモンゴルにおいて、寺院は学校のような役割を果たし、寺院には附属研究所のような施設があり、そこでは仏法に関する討論や医学の研究が行われていた。僧侶は単に聖界に仕える者としてだけでなく、俗人よりも高い学識を持つ人々としても尊崇されていた。チベット仏教は非常にアカデミックな宗教なのである。例えば、1921 年の社会主義革命の主導組織であるモンゴル人民党の創設者ボドーも、創設メンバーのひとりで、のちに独裁者となって「モンゴルのスターリン」と言われたチョイバルサンも、僧侶階級出身のインテリであった。ガンダン寺では今もかつての伝統が受け継がれ、日夜僧侶たちが研究に励んでいるのだろう。

観音堂の前では、色とりどりのデールやタキシード、ドレスを着た人々が大勢達並んでいた。どうも結婚式の記念撮影を観音堂の前でしているらしい。モンゴル人の信仰心の篤さには脱帽である。堂内には、25 メートルの高さを誇る金色の大観音像が立っていた。見上げなくては顔を拝めない、そのスケールの大きさに圧倒された。どうやらこの観音像の正式名称は「開眼観音」というらしく、眼病を患い、盲目だった活仏ジェブツンダンバ 8 世の眼病の治癒を願って作られたものらしい。現在の観音像は民主化後に作られた 2 代目で、初代観音像は前述の極左偏向の時代に破壊され、ソ連に持ち去られたという。モンゴルの史跡や名所にはたいてい、こういった社会主義時代の爪痕が刻まれている。

参拝客たちは 2 代目観音に懸命に手を合わせ、像を取り囲むように配置されたマニ車(表面に真言が刻まれ、内部には経文が収納された金属製の筒。1 度回すと、1 度経を読んだのと同じとみなされる)をガラガラと回している。私も像の周りを歩きつつ回した。例えば堂内は全面写真撮影禁止のはずなのだが、参拝客たちはみんな、熱心に拝んだ後、観音像の写真を撮っている。モンゴル人にとって仏教は、畏怖の対象というより、私の想像以上に身近なものなのかもしれない、と思わせる光景であった。

【8月8日(火)】

この日は、バスでウランバートルの郊外にある、ダンバダルジャー僧院へ行くことにした。数度の予定変更の結果、翌 9 日から列車で次なる目的地の町へ移動しようと計画していた

私は、ウランバートルを一度離れる前に先人たちに挨拶をしておこうと思ったのだ。ウランバートルの中心街を右往左往してなんとかバス停を見つけてバスに乗り、しばらく郊外の草原を走り、終点のひとつ手前のバス停で降車した。降りたのは私だけだった。しばらく草原を歩いたら、もはや見慣れたチベット仏教様式の建物が見えて来た。目的地の僧院である。

18世紀にウランバートル郊外に建てられたダンバダルジャー僧院は、かつては多くの僧が住む立派な僧院だったが、1921年の人民革命後の宗教弾圧で所属する僧の多くを殺害され、僧院そのものも廃止された。民主化後に僧院は再建され、堂宇も復興され、かつてのように僧が生活を営んでいる。ただ、この僧院には思わぬ日本との縁があるのである。

1911年に一度独立したモンゴルだが、中露の圧力に屈して1920年には独立を抹消され、中国の占領下におかれた。そんなモンゴルに突如現れたのが、誕生間もないソ連との戦いに敗れ、シベリアをさまよっていたロシア帝国軍の残党・白軍のウンゲルン男爵率いる「アジア騎兵連隊」であった。ウンゲルンがシベリア中の反ソ連的な人々を集めて結成した同連隊は、ロシア人、モンゴル人、中国人、朝鮮人、チベット人など約2000人の雑多な人種から成っていたが、その中には約50人の日本人がいたと言われている。この日本人の中には、白軍のパトロンとなることで、シベリアの内戦での漁夫の利を得ようとしていた日本軍によって派遣された職員もいれば、一旗揚げようと身ひとつで大陸へ渡った大陸浪人と呼ばれる日本人のゴロツキたちもいた。

同連隊は1920年、モンゴルを征服していた中国軍を撃破して、ボグドを推戴する傀儡政権を樹立した。その目的は、モンゴルに白軍の根拠地を築くことだった。白軍の勢力圏に入ったモンゴルには続々と白軍の残党が集まり、ウンゲルンはしきりに「日本が我々のバックについている」と語ったという。

しかし事情は変わった。モンゴル独立の為にソ連に援助を要請しに行っていたモンゴル人民党が、ソ連からの援助の下で人民義勇軍を結成し、モンゴルに駐屯する白軍への攻撃を開始したのだ。白軍の圧政に苦しむモンゴル人は続々と人民義勇軍に加わり、白軍は瓦解。ウンゲルンは逮捕・処刑され、アジア騎兵連隊も壊滅した。戦闘の最中、ウンゲルンと仲たがいで連隊から離脱・生還した者もいれば、人民義勇軍に制圧された首都フレーに潜伏したのち、命からがら日本の勢力圏である満洲へ逃れた者もいた。しかし、アジア騎兵連隊所属の日本人の殆どは戦死したと言われている。どういう経緯か、ダンバダルジャー僧院にはそうした日本人大陸浪人の霊を祀る日本人霊堂があるのである。

また同僧院は、第2次世界大戦後、ソ連軍によってシベリアに抑留されたのち、モンゴルへ労働力として派遣された日本兵たちの病院として用いられた。上述の霊堂には抑留の犠牲となった者たちが祀られ、日本人の墓地まであるのである。ウランバートルを訪れた日本人としてここにきちんと赴き、霊前に手を合わせねばと思ったのである。

旅行用にと買った4つポケットのフランス軍のジャケットを着た私の姿は、朱色の法衣に身を包んだ僧侶たちが闊歩する寂れた僧院内ではそれなりに目立ち、警戒されていたようだが、観光客だと気付いた僧に話しかけられたので「私は日本人。日本人霊堂が見たくて

やって来た」と言うと、すぐに責任者らしき僧を呼び、霊堂の鍵を開け、中に通してくれた。白い壁をもつ小さな霊堂の中には、仏像でもあるかと思いきや、花や遺影、日本のお菓子、戦死者や埋葬者の名簿が置かれているだけであった。

後で知ったことだが、遺影に映っていたのは旧日本軍で軍医で抑留経験者の春日行雄さんという方で、かつてダンバダルジャー僧院に設けられていた捕虜の病院で医師として勤務させられたのち帰国するも、帰国後も慰霊の為にモンゴルを度々訪れ、モンゴルと日本の国交樹立の糸口を作った人物でもあったらしい。そんな今は亡き春日さんを含む、日本人の為にと供えられた花やお菓子は、よく見るとどれも新しいものだった。開錠してくれた僧曰く、日本人の訪問客は結構いるとのことだった。なぜだか少しうれしくなった。もう少し大陸浪人や抑留者の痕跡があるかと思っていたので意外なくらいの収穫の少なさだったが、近代の日本とモンゴルの関係性について考えさせられる良い機会になった。

帰りのバスに乗っていて、思い出した話がある。シベリアに抑留された日本兵たちの中に「俺は抑留先のモンゴルで、モンゴル兵の格好をした日本人を見た」と証言する者がいたのである。第二次世界大戦の直前に起こったノモンハン事件で、モンゴル軍の捕虜になった日本兵の中には、生きて祖国日本に帰ったところで「なぜ自決しなかった」と責められるくらいならばと、モンゴルで生きることを選んだ者がいた。モンゴルはそうした日本人を受け入れた。そうした残留日本人モンゴル兵が、のちに抑留者の監視に回されたりしたのだろう。

「人的交流から見る近代モンゴルと日本の関係」を研究テーマにしても良かったかも、と思わされる帰路であった。

【8月9日(水)】

午前9時、9日間宿泊したゲストハウスにてチェックインを済ませ、重いスーツケースを引きずってウランバートル駅へと向かった。目指すはモンゴルの北方、ロシアとの国境に近いスフバートルという町である。駅前の駐車場は車で埋まり、私と同じように大きなスーツケースやカバンを手にしたモンゴル人でいっぱいだった。こぢんまりとしているがスターリン様式の駅舎は、映像や写真でしか見たことのない、北朝鮮の平壤駅にどこか似ていた。

駅の窓口で、人生で初めて外国の電車の切符を買った。スフバートルまでの所要時間は約10時間。価格はたしか5万トゥグルグほど。日本円にして約2000円。2等寝台車の切符は、まるでスーパーのレシートのように、本当にコレで乗れるのかと疑ってしまった。

だだっ広い駅のホームには、大きな緑色の古びた客車がズラリと並んでいた。客車の列があまりにも長く、先頭にある筈の機関車の姿は見えなかった。受付でもらったペラペラの紙切れのような切符を、乗降口の下に立つ警察官と見紛う制服を着た女性の車掌に見せると、紙を胸のポケットに収め、手で「乗れ」と合図された。どうやら切符は預かれるらしい。

乗降口の階段は高いうえにほぼ垂直に近く、スーツケースを運び入れるのに非常に難儀した。客車の床は木製、それ以外の設備はアイボリーの合成樹脂製で、素朴な印象を受けた。車内は、予想していたほど混雑していなかった。4年前の家族旅行で訪れたインドで乗った

寝台列車と比べると、何倍も居心地がよさそうだった。横になればベッドに早変わりする、ベンチのような客席では、談笑する人、飲み食いする人、スマホをいじる人、電車が動き出すよりも早く眠りにつく人など、それぞれのドラマが展開されていく。

10時35分、ガタン、ゴトンと、いかにも重そうな音を立てて列車が動き出した。時間が経つにつれて、車窓から見える景色が、都会や工場から草原と集落に変わっていった。ウランバートル駅を発って1時間もすると、あたりは一面大草原であった。ひたすら続く緑の草原、木々のそびえたたない小山の列、時折姿を見せる、木の柵に囲まれた集落、そして馬や羊、牛の群れ…自然を見てもあまり感動しない私でも、あの景色には魅力を感じた。

しかし、そう言っていたのは最初だけであった。延々と続く草原には早々に飽きた。途中、草原の真ん中にただポツンとプラットフォームがあるだけの駅や、小さな村の駅に止まることはあったが、どこも「本当にここに人が住んでいるのだろうか」と不思議な気持ちにさせられる場所であった。車内販売さえない電車での移動は、なかなか精神的に堪えた。

それでも午後8時、ようやく目的地スフバートルに近づいた頃、車窓から、地平線のかなたに沈む真っ赤な夕陽が見えた時は「この列車に乗って本当に良かった」と痛感した。モンゴルに限らず、大陸は夕暮れが遅い。夏のモンゴルの場合、世界が闇に包まれるのは午後9時以降である。

かつて、出稼ぎ労働者や開拓者として、富や名声を求める大陸浪人として、兵隊として、抑留者として、それぞれの事情を抱えて内外モンゴルやシベリアをさまよった多くの日本人もこんな夕陽を見たのかと思うと、感無量だった。あの日見た夕日は、生涯忘れられない光景になると思う。何より悔しいのは、また同じ行程で旅をして、同じ場所から夕陽を見ても、もう2度と初めてあの夕陽を見た時と同じ感動は味わえないことである。

列車がギギギョーッと重苦しい音を立ててスフバートル駅に止まったのは、午後8時半のことだった。重いスーツケースを先に地面に下ろし、自分の脚で地面を踏み、ふと左(方位で言うと北西)を見た時、ちょうど夕日は沈み切る寸前であった。夕日が沈む方向には山があり、その向こうにはロシアがある。言わずと知れたシベリアである。北西から風が吹いてきた。「遠くまで来てしまったなあ」と、久しぶりに日本語でつぶやいた。



沈みゆく夕日とスフバートルの駅舎

客車を降りるや、不愛想な車掌からレシートのようなヨレヨレの切符を返された。この切符をどこ改札に通せばよいのかと駅舎やホームをさんざん彷徨ったが、どこにも改札らしいものはない。下手なモンゴル語とロシア語で「この切符をどこで見せれば良い？」と駅員に尋ねたが「お前は何を言っているんだ？」という反応だったので、狼狽した。駅舎から出るときに切符を見せる必要などないとは、この時まで知らなかった。

切符騒動で時間を取られ、駅を出た時にはもう 9 時になっていた。少ない街灯の明かりが、小さな田舎の町を浮き彫りにしていた。とりあえず寝床を確保せねばと町中を歩き回り、やっと見つけた「セレンゲ」というホテルにチェックインした。夜 10 時半のことだった。国境の町なので通じるかと思いきや、スタッフは誰一人ロシア語が話せなかった。

【8月10日(木)】

早朝に目を覚ました私は、セレンゲ・ホテルを出て、町中を散策することにした。ホテルの前の小さな車道を挟んで、背の低いビルや住宅が立ち並んでいる。道沿いにはスーパーが 1 軒、食堂が数件あったが、コンビニは無かった。テクテクと奈良公園の鹿のように、白や茶色の馬が数頭散歩していた。野良馬たちは街路樹を食べたり、車道を悠々と散歩したり、やりたい放題だった。

ホテルから少し離れたところには、だだっ広い広場があった。市庁舎や大手銀行の支店、郵便局、モンゴル人民革命党、モンゴル民主党支部等の大きなビルに囲まれた広場の中心に、町の名の由来にもなった革命家スフバートルの銅像が立っていた。

この日の正午、私はバスに乗って、スフバートルから約 25 キロ離れたロシアとの国境にあるアルタンボラクという町へ行くつもりだった。同地にあるセレンゲ県協力博物館の、1921 年の人民革命に関する展示と資料を閲覧しなくてはならなかったのだ。

しかし、駅前ですれどれだけ待っても、来るはずのバスが来ない。それどころかタクシーはおろか、一般車すら滅多に通らない。まんじりともせず町中を歩いていると、突然雲行きが怪しくなってきた。そして雨が降り出した。やむなくホテルへ引き返した。結局この日は土砂降りになってしまい、博物館はおろか町のスーパーマーケットにすら行けなかった。

【8月11日(金)】

前日の午後と打って変わった晴天の朝、またも朝早く目を覚ました私は、町の散策を続けることにした。散策中、どこからか吹奏楽の音色が聞こえてきたので、どこかの学校の部活動の練習かと思いきや、モンゴル軍国境警備隊の基地から聴こえて来る行進曲だった。砂漠・草原用の茶色の迷彩服を着たモンゴルの軍人たちが、ゾロゾロと行進の練習をしていた。

さらに道沿いに歩くと、巨大な製粉工場が見えてきた。後から知った話だが、スフバートルは社会主義時代に農地開発が行われた結果、小麦の一大産地となった場所らしい。工場の前の交差点の真ん中には、巨大な金色の小麦束のモニュメントが鎮座していた。モニュメントの表面には、小麦畑、トラクターが走る村、そして自動車や電車が走り回る都市の絵が彫

刻されていた。恐らく、社会主義時代からあの場所に立ち続けていたものだろう。



製粉工場と小麦束のモニュメント



スフバートルの一角

製粉工場のそばには大きな集落があった。未舗装の道路に沿って立ち並ぶ木造の小屋は、どれも赤や青のカラフルなトタン屋根で覆われていて、写真や映像で見たシベリアの村の家によく似ていた。集落のはずれからは、南に向かってひたすら大草原が続いていた。

集落を出て北に向かって歩くと、またもや似たような集落にぶつかった。行きたい場所があったのだ。放し飼いの豚が雑草を食む、砂埃の舞う集落を抜けると、緑の丘にたどり着いた。丘には牛馬の糞やそれにたかるハエ、そして家畜の頭蓋骨が転がっている。それらを踏み越えて丘の頂上にたどり着いた。ある筈のものはなく、代わりにそこにあったのはオボー（石を積み上げて作る道標のようなもの。モンゴルの民間信仰のひとつ）と、町を見下ろすように立つ金の仏像だけだった。伝統に従ってオボーに小銭を供え、祈りの言葉を捧げ、仏像に手を合わせながら「道を間違えたか？」とっていると、その丘の中腹に、目的のものらしい白い物体を見つけた。すぐさま駆け寄った。大当たりだった。それはかつて抑留された日本兵たちの墓標だった。



スフバートルの日本人墓地

1945年8月の終戦後、多くの日本人がシベリアに抑留され、強制労働を強いられたことは有名だが、彼らの一部がソ連の友好国であるモンゴルにも派遣されていたことはあまり知られていない。モンゴルに抑留された日本人たちは、1950年代前半の帰国まで、モンゴル各地で建設作業に従事させられた。飢えと寒さ、過酷な労働、そして仲間内でのリンチで命を落とした日本人の数はおよそ1600人にのぼる。町はずれの丘の墓標は、同地で命を落とした日本人たちの為に建てられたものである。白く塗られた墓標の下にはもう遺骨は眠っていない。遺骨収集事業によって、日本に持ち帰られたのだ。

墓標のある場所からは、スフバートルの町と草原、山や丘が一望できた。彼らの魂が故郷にあるのか、それともスフバートルにあるのかは私には分からないが、とりあえず墓標に手を合わせ、終戦から78回目の夏が来たことを伝えた。

墓地の丘を下り、再び集落に戻った時、時刻は既に正午を回っていた。私は、昨日悪天候のため訪れることが出来なかったアルタンボラクの博物館へ行くための交通手段を確保すべく、道路へ向かった。タクシーを捕まえようと考えたのだ。モンゴルでは、一般車を利用したいいわゆる「白タク」が合法である。法律では、1km当たり1000トゥグルグ(約40円)と定められており、日本人の私からすると非常に安い。これまでトラブルに巻き込まれるのが恐ろしくて利用したことのなかった白タクだが、いつ来るか分からないバスや正規のタクシーを待っていたら時間を無駄にするだけである。意を決して道路わきに立って、走ってくる一般車に向かって手を振った。3台目で止まってくれた。モンゴル人ですらなかなか捕まえられない白タクをこんなに早く捕まえられたのだから、本当に運が良かった。

運転手の老人に「アルタンボラクまでお願いします」と言うと、料金は25000トゥグルグ(約1200円)と言われた。アルタンボラクまでは25kmなので、ちょうど法定価格である。

草原を貫く一本道を、プリウスはぐんぐん走っていく。あたりは一面草原、たまに人工物があったとしても道路標識か送電線くらいで、建物はほとんどない。たまに馬や牛の群れがはるか彼方をうろついているのが見える。20分ほど一本道を走ると、地平線の向こうにカラフルな屋根を持つ、背の低い町が見えた。老人は町を指さして「あれがアルタンボラクだ」と言った。その左(方位で言うなら北)にある隣町をさして「あっちがキャフタ。あそこはロシアだ」と言った。遂に国境の最前線まで来たのだった。

アルタンボラクは、ロシアとモンゴルを繋ぐ陸の国境の町である。それゆえ、活気に満ちた、それでいてどこか緊張感の漂う町かと思っていたが、私の想像以上にのどかな町だった。スフバートルと変わらず道端で家畜が草をムシャムシャと食べ、走る車が砂埃を巻き上げる、何の変哲もないモンゴルの田舎町だった。そんな町の真ん中、国境からわずか2kmほどの場所にあるのが、私の目的地・セレンゲ県協力博物館であった。双眼鏡を縦に置いたような、不思議な形をした建物であった。

1920年、一度勝ち取った独立を奪われ、再び中国の支配下に置かれたモンゴルに突如、シベリアから白軍の一派がやって来た。白軍はモンゴルを占領していた中国軍を破り、王侯貴族を解放し、モンゴルの再独立を宣言した。しかし白軍の本当の目的は、モンゴルに白軍の



セレンゲ県協力博物館前にて



ロシアを目指す車の行列

傀儡政権を築き、反ソ運動の根城とすることだった。ちょうど同時期、中国の支配からの解放を目指すモンゴル革命党が、誕生間もないソ連に援助を要請していた。モンゴルが白軍の根拠地と化すのを見過ごせないソ連は、革命党への支援を確約した。そして1921年3月、ソ連から武器の援助を受けた革命党は、ロシアとモンゴルの国境の町キャフタで、モンゴル人を集めて人民義勇軍を結成。白軍の支配下にある首都フレー(現ウランバートル)奪還への第一歩として、中国軍の残党に占領されたアルタンボラクの解放へ乗り出した。アルタンボラク攻略は見事成功し、同地には革命臨時政府が樹立された。セレンゲ県協力博物館は、この1921年の「人民革命」を記念して、モンゴルとソ連の共同作業で建てられたものである。

ドライバーの老人にお金を渡し、礼を言って別れた後、私は博物館を目指した。博物館の外には、門の左右両脇にひとつずつ大きな記念碑が立っていた。門に向かって左側に立っていたのは、人民義勇軍の最高司令官スフバートルをたたえるモニュメント、右側に立っていたのは、第二次世界大戦で戦死したソ連兵の鎮魂のモニュメントであった。碑文にはロシア語で「誰のことも忘れない、何ひとつとして忘れない」と刻まれていた。

入館料は5000トゥグルグ(約200円)。入館してすぐに目に入る大きな白い壁には、人民義勇軍の軍歌「キャフタ城砦」の歌詞が刻まれていた。館内には、かつて人民義勇兵が実際に用いていた武器や軍服、帽子といった装備品から、兵士たちがのちに政府から受け取った賞状や「人民義勇兵証明書」まで展示されていた。絵画や彫刻も多く展示されていたが、殆どが義勇軍司令官スフバートルを称えるものばかりだった。1923年に夭折したスフバートルは確かに1921年の革命の英雄ではあったが、社会主義時代にその経歴をかなり歪曲され、革命のシンボルとして過剰に崇拝・神格化されていたきらいがある。

そうしたプロパガンダ・アートより興味をひかれたのは、私の研究対象である武器・装備類であった。お馴染みのPM1910機関銃やモーゼル拳銃はともかく、私が目を釘付けにされたのは、展示室の壁に飾られた3挺のライフル銃であった。3挺のうち2挺はアメリカ製のスプリングフィールドM1903ライフル銃と、ロシア・ソ連製のモシン・ナガンM1891ラ

イフル銃だとひと目で分かったが、残りの 1 挺の正体が分からない。後で調べて分かったが、その銃はイタリア製の M1870 ヴェツテルリというライフル銃であった。モンゴル軍が使った銃がロシア製、アメリカ製、イタリア製とは、興味深いラインナップである。

モシン・ナガンはロシア帝国軍もソ連軍も使っていたので、ロシアと隣接しているモンゴルの軍隊が使っていても不思議ではないが、気になるのはイタリア製のヴェツテルリとアメリカ製のスプリングフィールドである。これもあとから知ったことだが、ロシア帝国は第一次世界大戦中の 1916 年、約 40~50 万挺のヴェツテルリをイタリアから購入していたらしい。恐らくその中の数挺が人民革命軍にも用いられたのだろう。



上からヴェツテルリ、スプリングフィールド、そしてモシン・ナガン

スプリングフィールドについては、これはあくまで私の推測だが、1918~1922 年のシベリア内戦期、赤軍を打倒するべくシベリアに出兵していたアメリカ軍が使用していたスプリングフィールドが赤軍によって鹵獲され、人民革命軍の手に渡ったのではないだろうか。シベリアの赤軍パルチザンの間でもモンゴル人民革命軍でも、敵の武器の鹵獲使用は一般的だったので、可能性としては十分にあり得る。

また、ナガン M1895 拳銃も展示されていた。モシン・ナガン M1891 の開発者と同じ、エミール・ナガンと弟のレオン・ナガンのナガン兄弟によって開発された、ベルギーの拳銃である。ロシア帝国軍によって広く用いられ、のちにソ連軍にも愛用された同銃が、巡り巡ってモンゴルまで辿り着いていたらしい。

モシン・ナガンにヴェツテルリ、PM1910 機関銃、そしてナガン拳銃と来れば、もはや人民革命軍の装備はほぼロシア帝国軍(白軍)の装備の使いまわしである。もっとも、人民革命軍のバックについていたソ連赤軍がそもそも白軍の装備の鹵獲品を用いていたことを思えば、これは当然のことである。ソ連は当初、祖国解放のために中国との戦争を望むモンゴル人民党を支援するつもりはなかったが、白軍がモンゴルを根拠地化しようとするや、モンゴル人民革命党に軍事・政治的援助を行った。モンゴル人民革命軍は、ソ連赤軍の別動隊とし

ての側面を持っていたということもできるだろう。

博物館は2階建てで、2階には何があるかと思ったら、プロパガンダ・アートだらけだった。こちらは早々に切り上げた。最後に、1階のロビーでソ連の軍服を着て写真が撮れたので、記念写真を撮影してから、退館した。帰りは正規のタクシーに乗った。なぜか行きより安く、料金はたったの2万トゥグルグ(800円)だった。

【8月13日(日)】

アルタンボラクの博物館も国境も訪れ、為すべきことも終えたので、私は首都ウランバートルへ帰ることにした。列車の出発は午後8時55分。ウランバートル～スフバートル間には、1日に朝と晩の2本列車が出ている。今回私は、行きとは違う雰囲気を味わうべく、夜行列車に乗ることにした。

出発までは十分時間があるので、それまで町を歩いて、最後の思い出を作ることにした。これまで行ったことのなかった、駅前の住宅街へ行った。ほかの建物と比べると比較的新しい綺麗な住宅が立ち並び、歩道には金属製の大きな花や、イルミネーションのついたアーチが立ち、古びたアパートの側壁には手を繋いで笑顔を浮かべた人々の巨大なイラストが描かれていた。殺風景な町を華やかに見せようという工夫なのだろうが、どこか社会主義国家を彷彿とさせる、わざとらしい明るさを感じる光景であった。

正午、一通り住宅街を回り、次はどこへ行こうかと思っていたら、また空が曇り、嫌な風が吹き始めた。雨が降る前兆だと感じ、宿に向かって歩き始めたら、予想は見事に的中した。一昨日のような激しい雨が降り始め、観光どころではなくなってしまった。やむなくまたも宿に引きこもり、雨が止むまで、ウランバートルで買った歴史書の翻訳をした。主人とすっかり顔なじみになった駅前の食堂まで、雨の中を走って行きもしたが、残念なことにその日は閉店していた。結局雨が止んだのは午後7時を回った頃だった。



雨に煙るスフバートルの町

宿のチェックアウトを済ませ、駅で切符を買い、重い荷物を引きずって、不愛想な車掌に一瞥を投げかけられながら、寝台車に乗った。今回の私の持ち場は、寝台車の2段ベッドの2段目だった。やたらと高いベッドによじ登り、車窓からスフバートルの町の夜の明かりを見た時、町にちゃんと別れを告げられなかったことが残念に思えた。寝台列車はガタンゴトンと荘厳な音を立てて、定刻通りウランバートルへ向けて出発した。

【8月14日(月)】

出発時と同じく、列車は定刻通り6時半にウランバートルに着いた。「タクシーいらんか？」と声をかけて来る客引き達をかわし、数日前に通った道を再び歩き、目指すは9日まで止まっていた City guesthouse & Tours ゲストハウスである。私は同ゲストハウスに再びチェックインし、重いスーツケースを自分のブースに預けた。そして軽装で、モンゴル到着初日に私を空港からウランバートルまで案内してくれたタクシードライバー・マンチルさんの到着を待った。スフバートル滞在中、私は少し予定を変更していた。当初、ウランバートル南方の町ゾーンモドを訪れた際は、同地に宿泊する予定だったが、マンチルさんと連絡を取り合ったり、現地の方々から話を聞くうちに、ゾーンモドには宿泊してまで見るべきもの(私が求めているもの)がないらしいことが判明した。加えて、ウランバートルからゾーンモドまでの距離は片道40ほどである。そこで予定を変更し、ゾーンモドは日帰りで行くことにしたのだった。そういった経緯で、夜までには市内に帰って来る予定だったから、再びウランバートルでゲストハウスにチェックインしたのだった。

City guesthouse & Tours の前でマンチルさんと合流し、私はマンチルさんの運転するタクシーでゾーンモドへ向かった。タクシーは高速道路を疾走する。旅の話をした。自分のモンゴル語が少しは上達していることが分かり、なんだか嬉しかった。

ゾーンモドは、想像していたより大きな町で、少なくともスフバートルよりは栄えていると思った。工場や学校はスフバートルにもあったが、映画館があるのには驚いた。大都市ウランバートルの恩恵を被っているのだろう。

そんな町の中心近くにある、ゾーンモド博物館に行ってみたが、歴史に関する展示よりも、動物の剥製の方が大量に展示されていて、少々期待外れだった。もっとも、トナカイやオオカミの剥製を見る機会もそうそう無いので、貴重な経験にはなった。ちなみに、ゾーンモド博物館にもちゃんと、PM1910 機関銃は展示されていた。この機関銃、どうやらモンゴル人民革命と、それに伴う初の本格的に近代的なモンゴル軍(人民義勇軍)創建のシンボルのように扱われているらしい。

正午ごろに博物館を出た後、予定ではマンチルさんのタクシーで、町はずれの山の近くにあるマンジュシュリ寺という歴史ある寺院を訪問する予定だったが、またもタイミング悪く、空が曇り始めた。嫌な予感がしたのはマンチルさんも同じだった。「マンジュシュリ寺への道はあまりよくない。雨が降ったら最悪だ。帰ろう」という。高速を降りた後のゾーンモドへ通じる道のガタガタ具合を身を以て知っていた私は、マンチルさんの言葉に従うこ

とにした。我々が車でウランバートルへの帰路に着いた瞬間、大雨が降り、雷鳴が轟いた。大雨が未舗装の田舎道を泥沼にしていくのを見て、マンジュシュリ寺に無理していかなかったのは正解だったと思った。ズーンモードでは期待したほどの収穫が得られなかったが、これはこれで経験だと思ふことにした。車窓から、雨にくすぶるウランバートルの町が見えた時、なんだかとてもホッとした。

【8月15日(火)】

この日は、ウランバートルの中心部・スフバートル広場の近くにあるザナバザル美術館へ行った。ザナバザルとは、17～18世紀にモンゴルで名を挙げたチベット仏教の高僧、活仏ジェブツンダンバ1世の法名である。彼の名に因んでネーミングされただけあって、館内は仏像や仏画、曼荼羅で埋め尽くされていた。しかし私が同美術館を訪問したのは、ただ仏教美術が見たかったからではない。同博物館がおよそ100年前にロシア人によって建てられた、モンゴルにおける最初期の西洋建築物のひとつだからである。

現在ザナバザル美術館として多くの人々に愛されている2階建てロシア式西洋建築物は日露戦争直後の1905年に、当時モンゴルで多大な勢力を誇っていたロシア人商人のひとり、グドウィンツァルによって商館として建てられた。1921年の革命後は人民政府によって接收され、中央百貨店として用いられた。仏像や仏画の展示場とは別に美術館の建物の歴史に関する展示もあったが、個人的には仏教美術系の展示より後者の方が面白かった。

社会主義時代の初期にあたる1920、30年代の写真の中には、白塗りの壁に西洋式の窓を持つ建物に「ミヤサタルゴーヴァヤ・マンツェンコーバ(モンゴル中央肉類商業協同組合)」と、ロシア語と縦書きモンゴル文字で書かれた看板が掲げられている1920年代の写真や、1931年の開業10周年を記念して、建物全体に電飾が付けられ「10 zilin oii mandatugai(10周年おめでとう)」という大きな文字が屋根に取り付けられている写真(1930年から1940年にかけて、モンゴル語は現行のキリル文字ではなく、ラテン・アルファベットで表記されていた)、屋根の上に赤い星が取り付けられ「ユニヴェルマーグ(百貨店)」とロシア語で書かれた看板が掲げられていた時期の写真など、私の研究対象ともかわりのある時期に撮影された、貴重な写真が大量に展示されていた。思えば1920年代から1940年代までの約20年間に、モンゴルの文字は縦書きモンゴル文字→ラテン文字→キリル文字と、3度も変化を遂げているのだ。その背景にあったのは、もちろんソ連の影響である。

時代が新しくなるほど、写真の中の人々の着る服がデール(民族衣装)から洋服に変わり、道を走る車の数も増えて行く点には、モンゴルの近代化と社会主義化が表れているように感じられた。特に興味深かったのが、写真中に小さく映っている女性の服装の変化である。デールを着ていた女性たちが、時代が近づくに連れてプラトク(ロシア女性が頭に巻くスカーフ)を巻くようになっていた。近代化、社会主義化に伴い、モンゴルではロシア化も進んで行ったと聞いていたが、ファッションの基準までロシア化していたというのは想定外だった。今更ながら「モンゴル人のファッションから見るモンゴルにおけるソ連文化の影響」

を卒業論文のテーマにしてもよかったかも、と思わされた。

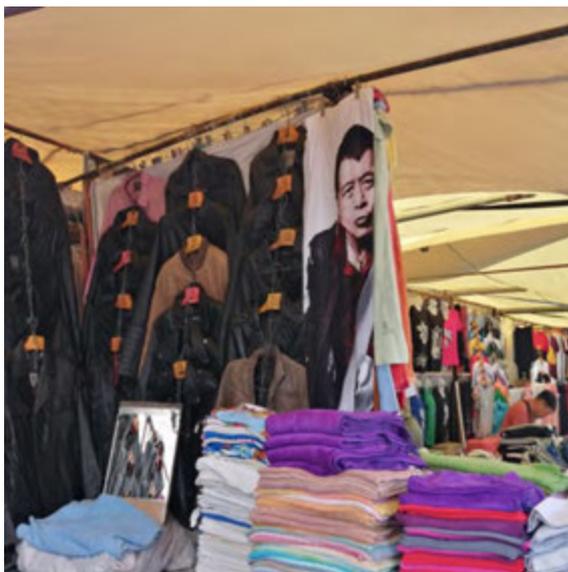
【8月16日(水)】

この日は、ウランバートル市内東部にある市場ナラントール・ザハへ行った。卒業論文の参考文献を購入する為である。ナラントールへは2週間ほど前にも行っているが、その時はあくまで下見で、物品を買ったりはしなかった。遠隔地への移動でかさ張る荷物を増やしたくなかったからである。しかし今回はちゃんとした目的のある訪問である。

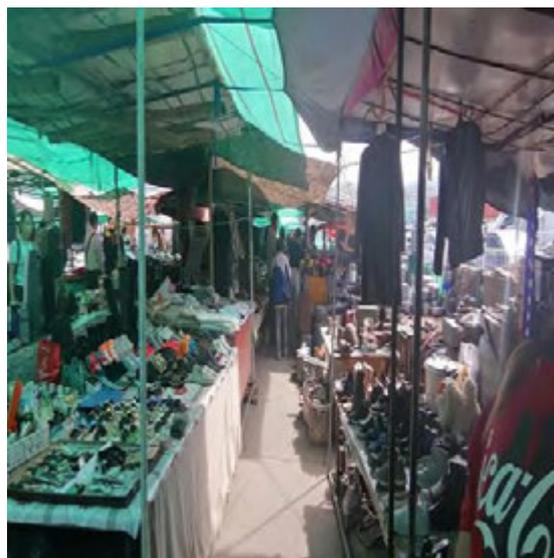
巨大な駐車場を持つ広大な敷地一面に広がった青や白のテントの海のような市場は、祭りのような賑わいを見せていた。私が訪問したのがちょうど正午だったこともあってか異常な人込みだったが、それ以上に売られている品物のラインナップが異常だった。

市の中心街にあるノミンデパートは中流階級向け、シャングリラ・モールは上流階級向け、といった雰囲気だったが、ナラントールは完全に一般庶民の買い物の場である。テントの下には食料品から衣服、工具、日用雑貨、自転車、家財道具、玩具、学校の制服まで、何でも並んでいる。これは面白い書籍が手に入るのではと、期待も高まった。

大通りに面した市場の出入り口から入ると、真っ先に目に入るのは服や食料品といった一般的な品々である。しかし少し奥まった所に行くと、前回の訪問時には見つけれなかった品が目に入って来た。自動車やバイクのエンジン、鉄条網、ゲル、馬頭琴、ライフル銃のスコープや偽ブランド品、社会主義時代の勲章やレーニンの胸像、「大日本帝国海軍」や「中華民国国民革命軍」と刻まれた短剣、拳銃の果てにモンゴル軍や韓国軍、米軍の放出品…。ゲストハウスのスタッフたちがナラントールのことを「ブラック・マーケット(闇市)」と呼んでいた理由が分かった。とりあえず、ミリタリーショップでモンゴル軍の帽子と韓国軍のバッグ、そして米軍の水筒を購入し、本屋を探した。



なぜかナラントール・ザハで売られていた矢沢永吉さんのタオル。本当に何でもある



商品が多すぎて、肝心の人間の通り道がなかった

いざ発見した本屋では、素晴らしい買い物ができる。1921年の社会主義革命に従軍した人民義勇軍兵士の回想録全4巻セットが、なんと40000トゥグルグ(約1600円)で売られていたのである。かつてのモンゴル軍の姿を知るうえで確実に役立つ資料なので、迷うことなく購入した。また同店で、新品同様の中古歴史書籍『人民革命に繋がる100の思想』『社会主義時代のモンゴル人』という本も購入した。どれも大きく重い本ばかりなので、リュックがパンパンになってしまったが、これらを生かして最終的に完成する論文のことを思うと、帰り道の足取りも軽かった。個人的には、大満足の収穫であった。

【8月17日(木)】

この日は、スフバートル広場の近くにあるモンゴル国立中央図書館へ資料の探索に出かけた。社会主義時代には図書館の前にはスターリンの銅像が立ち、館名も「スターリン記念モンゴル国立図書館」だったそうだが、民主化後現在の名前になったという。図書館前のスターリン像も今は無く、その代わり、近代モンゴルにおいて活躍した学者リンチンの銅像が立っている。社会主義時代を思わせる外観の建物の中には何があるかと入ると、ここで思いもよらないことが起こった。仏教や国際関係に関する館内展示は自由に見ることが出来たし、この中にも興味深いものは多々あったのだが、肝心の所蔵資料に関しては、修士号取得済みの研究者以外には見せられないと言われたのだ。私の調査が甘かった。本当に悔しかった。悔しくてしょうがなかったが、悔やんでも仕方がないので、国立中央図書館は早々に切り上げて、次なる目的地・ウランバートル市中央図書館へ行くことにした。

市中央図書館は外観こそ立派だったが、館内は質素で、所蔵図書数も想像より少なかった。館内が薄暗く、冷房が一切効いておらず、職員さんが全員機嫌が悪そうだったことなどもかく、私が求めているような資料が少ないのは大問題であった。それでも、論文の参考になりそうな資料はいくつか見つかったので、職員さんと交渉して、コピーさせて頂いた。図書館訪問が全くの無駄にならなくて、心の底から安堵した。結局この日の午後は、資料の探索とコピーに費やした。

【8月18日(金)】

前日の作業の続きで、この日も図書館での資料探しとコピーに費やした。朝から入館し、夕方まで長時間館内に滞在して書棚とコピー室を行ったり来たりしていたため、職員さんにも顔を覚えられてしまった。

夕方、閉館時間が間近に迫った頃、私は目的の資料を全てコピーし終えた。薄暗いウランバートルの町を宿に向けて歩く私のカバンの中は、大量のコピー用紙でいっぱいだった。

【8月19日(土)】

この日は、チョイジンラマ寺院博物館へ行った。1908年に活仏ジェブツンダンバ8世の

弟の為に建てられたというチョイジンラマ寺院だが、ソ連の圧力の下で政治的粛清が断行されていた真っ只中の1937年に閉鎖され、寺院としての機能を失った。しかし翌年、志ある人々により仏教博物館として改修され、その結果、伽藍も仏像等の収蔵品も破壊を免れた。そして今も博物館は、オフィスビルや高層ホテルに囲まれたウランバートル中心街の一角で、経営を続けている。



大都会のど真ん中に立つチョイジンラマ寺院博物館

初めて見た時はそのエキゾチックさに圧倒されたチベット仏教式寺院建築だったが、これまでに何度も見て来たので、そんなに驚きはしなかった。人間の慣れとは面白い。チケットを購入し、入場。色あせた赤い壁と、緑の屋根瓦を持つ門を潜り、本堂へ入る。

本堂には金色の仏像が安置され、その周囲を、蓮華座を組む高僧の等身大人形や、ショーケースに入った仏像が取り囲んでいる。高僧の人形の頭上には、カラフルな天蓋がぶら下がっている。その天蓋に気を取られて天井を見上げると、朱色に縁どられた格天井の間に仏様の姿が描かれていた。朱色の柱には金の登り龍が描かれている。さらに天井からは、布に絵を描いて作った人形がいくつも逆さ吊りにされている。人形は苦悶の表情を浮かべ、腹部からの出血の描写や、手や足が破損している描写があった。地獄の責め苦に遭う人々の姿を現しているのだろうが、これにはさすがに圧倒された。

本堂はふたつの部屋から成っており、奥の部屋へ向かうと、18～19世紀に描かれた仏教絵画が大量に展示されていたが、仏様が集う極楽浄土、といった風景よりも、地獄で苦しむ人々を描いたものの方が多かった。獄卒に剣や槍で刺されて出血する人、炎の部屋に閉じ込められて藻掻き苦しむ人…むごたらしいものばかりだった。

しかしそれも見慣れてしまうから面白い。奥の部屋の天井からも布人形がぶら下がっていたが、見慣れてしまうと、その苦しむ表情もどこかユーモラスに見えて来るのだ。

本堂の両脇には小さなお堂があり、それぞれ中には大小さまざまな金色の仏像が収納されていた。金色の仏像も、最初は俗っぽいなあとあまり有難味が感じられなかったが、見て行くうちに「こういう仏様もいるんだな」と受け入れられるようになって来た。

全体的にとっても良い博物館だったが、私の研究対象の時期とも重なる社会主義の時代に

チョイジンラマ寺院がどんな扱いを受けて来たのかに関する展示が何ひとつとしてなかったのは残念であった。チケット売り場以外にスタッフもいなかったのので、話を聞くこともできなかった。因みに、恐る恐るチケット売りの係員さんに「この寺の歴史についてご存じですか？」と尋ねたところ「歴史が知りたいのなら、すぐ近くにある国立図書館に行け。俺は知らん」と返された。その図書館で門前払いを食らった身なので、苦笑するしかなかった。

【8月20日(日)】

この日は、現地書店での教材購入に充てた。ウランバートル市内には複数の書店があると事前に確認していたので、リュックを背に市内をさまよひ、数か所訪問したが、私が求めているようなもの(モンゴル近代史に関する書籍や、モンゴル語辞書)はあまり置いていなかった。歴史書コーナーへ行くと、四方八方どこを見てもチンギス・ハーンの顔がデザインされた表紙の本ばかりだったのだ。ここになればもうどこにもないだろうと、最後の砦のような感覚で、市内中心部に立つノミンデパート7階の書店へ行ったら、これが大当たり、モンゴル近代史関連の書籍はおろか、19世紀にモンゴルを訪問した欧米人探検家が書いた探検記のモンゴル語版まで、興味深い資料がズラリと並んでいた。なぜもっと早くここへ来なかったのかと心から後悔した。必要なものを数冊見繕って、浮かれながら買い物かごに本を入れた。辞書も、ほかの書店よりずっと充実していた。これまでの書店探索に充てた4時間と、それに費やした体力は一体何だったのかと、ため息が出た。

【8月21日(月)】

ウランバートル最後の朝、私は午前5時に目を覚ました。午前8時50分には韓国・仁川国際空港行きの飛行機が出発する。6時半にチェックアウトを済ませ、長い間お世話になったゲストハウスのスタッフや、既に目を覚ましていた顔なじみの宿泊客たちに別れを告げた。本でいっぱいの重いスーツケースを手に、背中には畳んだデール(これが2キロ近くの重さを誇り、かなりのお荷物になった)を入れたリュックを背負い、やっどこき階段を下り、下の通りで待っていたお馴染みのタクシードライバー・マンチルさんのタクシーに乗り込んだ。空港までの送迎も、マンチルさんに頼んだのだ。タクシーは、まだ殆ど車の走っていない早朝のウランバートルを疾走する。昼間の喧騒が嘘のように、街は静まり返っていた。

タクシーは7時10分頃に空港に着いた。マンチルさんと別れの握手を交わし、空港で荷物を預け、出発を待った。空港での手続きにもすっかり慣れていた。もはや空港の土産屋を見る必要もないほど土産は買い込んでいたし、土産話で良ければ売るほどある。もともと、いろいろと疲れ切っていたので、今更観光客で賑わう土産物屋に飛び込む力も残っていなかったのので、ロビーでゆっくりと飛行機の到着を待った。

飛行機は予定通り8時50分、ウランバートルの空へ飛び立った。そのとき、去年の夏、モンゴルを発つ飛行機の中でふと湧いて来たのと全く同じ思いが、私の胸中に湧いて来た。「私はまた近いうちに、ここに戻って来るんだろうなあ」。

◎結論

今回の研修旅行を通して、20世紀初頭のモンゴル軍の装備について明らかになった点を簡潔に述べるなら、①1911年までの清朝治下の時期には完全に清式、②1911年から1920年までのボグド政権軍時代には清式とロシア式の折衷、③1921年から1928年までは一応ソ連軍式ながら、武器から軍服まで、あらゆる物資が行き届いていない状況が続いた。しかし④1928年以降、赤軍と改称されたモンゴル軍はソ連のバックアップで、完全にソ連軍化した。この背景にあるのは、モンゴルと清、ロシア、そしてソ連との関係である。

清朝治下の時代は、装備から軍制まで全てが清によって定められた通りだった。

ボグド政権時代、ボグドはモンゴル軍の近代化を目指しはしたものの、結果は不十分に終わった。その例を挙げるなら、国立博物館で見た写真の中で、ボグド政権軍の兵士は清朝治下の時代のままの軍服(デール)に、西洋式のベルトを締めてロシア軍騎兵の肩章を付けていた。この中途半端なロシアの影響の背景にあるのは、清(1911年以降は中華民国)との緩衝地帯としてモンゴルを欲する一方、中国との外交関係を考慮してボグド政権への大々的な援助には踏み切れなかったロシアの煮え切らない態度ではないかと私は考えている。

1921年にモンゴル解放の為に結成された人民義勇軍は、革命後は人民革命軍と改称され、ソ連の支援下で、義勇軍時代のバラバラな装備の均一化と近代化が図られた。しかし当時のソ連はモンゴルより中国を重視しており、あくまでモンゴルは、ソ連が支援していた中国の革命運動の中継拠点に過ぎなかった。そのため、軍事的援助は徹底しておらず、1920年代半ばまでのモンゴル軍はあまり近代的な装備を保有していなかったし、ソ連軍は中国との外交関係への配慮から1925年にはモンゴルから撤退している。

しかし1927年、中国の革命運動が大失敗に終わった頃、事情が大きく変わった。同時期、大陸での存在感を強めつつあった日本の脅威を恐れたソ連の指導者スターリンは、来るべき対日戦に備えて、モンゴルを緩衝地帯化しようとした。中国革命の中継地としての役割を終えたモンゴルは、革命の対象とされたのだ。「日本のスパイ」の濡れ衣を着せられた多くのモンゴル人が粛清され、社会主義化が推し進められる傍ら、モンゴルはソ連軍の前線基地化された。1928年に人民赤軍と改称されたモンゴル軍内では、かつてない装備の近代化・ソ連化が推し進められ、モンゴル軍内の要所要所にはソ連軍から派遣された顧問が配置された。ソ連とモンゴルの間の輸送路や鉄道の整備や、空軍の装備の充実化、武器の国産化も行われた。親ソ派の首相チョイバルサンはモンゴルにおけるソ連軍の駐留を認めた。そして1938年のハルハ川戦争(ノモンハン事件)ではソ連軍と共同で日満軍を撃退し、1945年にソ連が日ソ不可侵条約を一方的に破棄して対日参戦した際も、モンゴル軍はソ連軍と共に日本の支配下にあった内モンゴルへと進撃している。

この時期、モンゴル人は国家の運営権をソ連に奪われていたと言っても良いだろう。モンゴル軍は完全にソ連軍の支隊と化し、モンゴルはソ連を構成する「16番目の共和国」と揶揄されていた。しかし、ソ連という強力な後ろ盾がいたからこそ、当時日本がモンゴルに本格的に手出しできなかったのも事実であろう。ソ連のバックアップなしにモンゴルが独立

を保てたかどうか(ひいては現在のモンゴル国の独立が保たれていたか)は非常に疑わしい。

その点を考慮すると、ソ連の傀儡としてしばしば批判されるチョイバルサンも、本人が意図していたか否かはともかく「ソ連の傀儡になったことで」モンゴル独立の維持に一役買ったことになる。モンゴル近代史を考える上では、彼の思想や行動の分析もせねばなるまいと実感させられた。

以上が、私が今回の研修旅行の中で手に入れ、翻訳した資料や、見聞したモンゴル軍の写真や装備類から得た情報を総合的に考察した結果捻り出した、私なりの結論である。清露、中ソ、そして日本といった大国に挟まれたモンゴルの軍隊の姿は、常に周辺の大国の情勢に左右されて来た。その姿は、激動の20世紀前半のアジア情勢の反映と言っても良いだろう。

◎おわりに

最後になりましたが、今回の研修旅行はそもそも、天理大学ふるさと会の海外研修制度という素晴らしいシステムの存在なしには成立しえないものでした。浅学菲才の一学生に過ぎない私の研究が充実したものになりそうなのは、偏にふるさと会海外研修制度に助けられたお陰です。改めて、この場を借りて感謝を申し上げたいと思います。今回の旅行の出発前、関西空港のロビーで自分のことを、若くして中国大陸へ渡り、のちに満洲の馬賊の首領となった、尊敬する小日向白朗と重ねて浮かれていたほど、あらゆる面で未熟者の私ですが、今回の旅行を通して知識の面だけでなく、人間的にも多少は成長できたのではないかと考えています。同制度を活用して、これからも多くの志ある学生たちが海外へ雄飛することを、心より願っております。そうすることこそ、天理大学を築き、広い世界への道を切り開いてきてくれた偉大な先人達への最大級の恩返しとなると、私は信じております。



スフバートル市郊外の日本人墓地の丘より、スフバートルの町を望む
このまま南へ進むと、地図上では日本に辿り着く